

【月刊】キリスト教書評誌

本のひろば

August
2021 8

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2021年8月1日発行(毎月一回発行)第764号

● 出会い・本・人

自分史の一瞬をとらえた本 ミラ・ソントーク

● 特集 香港のキリスト教を知るには

この三冊！ 松谷暉介

● 本・批評と紹介

深田未来生、左近 豊、奥田知志、月本昭男他著／増田 琴編

信仰生活ガイド 信じる生き方 上林順一郎

佐藤 彰著

悲しみの過去を手放し希望の未来へ 千田次郎

芝山 豊、滝澤克彦、都馬バイカル、荒井幸康編

聖書とモンゴル 月本昭男

上田光正著 キリスト教の死生観 芳賀 力

加藤常昭著 加藤常昭説教全集32

コリントの信徒への手紙一講話 福嶋裕子

鶴沼裕子著 逢坂元吉郎 鈴木範久

キヤスリン・スピント著／打樋啓史、村瀬義史訳

心の垣根を越えて 片柳弘史

小笠原優著 信仰の神秘 阿部仲麻呂

既刊案内

書店案内

自己変革を
促す感動体験へ
のいざない



十四歳からの読書ナビ 小原信著

著者がこれまでどのような本と出会い、その出会いが自らをどのようなように形成していったのかを語る実存的な読書案内。圧倒的な衝撃で人生が一新されるような、全身のな知にかかわる読書のすすめ。

● 四六判・並製・400頁・定価2,200円



稀代の新約聖書学者による新約聖書全巻の講解シリーズ、ついに刊行!

現代の第一級の新約聖書学者にして、英国のバランズのとれた穏健な聖書解釈の伝統を受け継ぎ、教派を超えて親しまれているN・T・ライト。本シリーズは、聖書の使信を現代につなぐ最良の手引きであり、説教黙想、聖書研究、そして個人のデポジションにも最適。



N・T・ライト新約聖書講解 9
すべての人のための**ローマ書** 1 1-8章

N・T・ライト著 浅野淳博訳

第9巻は、パウロ神学の最高傑作とも言われるローマ書。そこで彼が描こうとした「救い」「義」とは何か? 新約聖書全体をイスラエルの回復という大きな物語として捉え、そこから現代人のへのメッセージを鮮やかに説き明かす。

● 四六判・並製・224頁・定価2,530円

『N・T・ライト新約聖書講解』全18巻

日本語版監訳 浅野淳博・遠藤勝信・中野実

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|------|-------------------------|-------|----------------|--------------------------|-------------------|---------|---------|---------|--------|----------|---------|----------|---------|-------|--------|----------|---------|
| 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| ヨハネ黙示録 | ヨハネ書 | ヤコブ書、第1・第2ペトロ書、第1・第2・第3 | ヘブライ書 | 第1・第2テモテ書、テトス書 | エフェソ書、フィリピ書、コロサイ書、フィレモン書 | ガラテヤ書、第1・第2テサロニケ書 | 第2コリント書 | 第1コリント書 | ローマ書2 | ローマ書1 | 使徒言行録2 | 使徒言行録1 | ヨハネ福音書2 | ヨハネ福音書1 | ルカ福音書 | マルコ福音書 | マタイ福音書2 | マタイ福音書1 |
| | | | | | | | | | (9-16章) | (1-8章) | (13-28章) | (1-12章) | (11-21章) | (1-10章) | | | (16-28章) | (1-15章) |

次回は
『マタイ福音書 1』
乞うご期待!

(1年に3冊の刊行予定)



自分史の一瞬をとらえた本

人 本



ミラ・ゾンターク

研究のために、文字になった歴史を語り続ける本や新聞・雑誌、その他の資料を日々手にする仕事をしている者として、しばらく前から自分の「本」に対する態度を疑いはじめた。読みたい本より読まなければならぬ本を優先したり、熟読した本の内容をすっかり忘れていたりしている。もとより恣意的解釈、剽窃や焚書といった本への冒涇は研究者として避けてきたが、それでも本に対する自責の念が深まり、以前のように前向きな気持ちで本と接する時間が少なくなつたように感じる。

この切ない気持ちを克服するために、私と本との出会いの原点に戻ってみた。未だ私の意識と本棚に残っている「最初に出会った」本は、家族の分区分園（クラインガルテン＝ドイトンなどで行われている市民に貸し出された小規模農園）のバンガローで見つけた詩集である。九歳の私は、自分の手で耕して咲かせたアケライの花と分区分園を通るせせらぎの水を楽しんでいたが、暇に飽かせてその本から一つの詩を選んで暗記した。テオドー

ル・シュトルムが一八五五年に作った「夜鳴きうぐいす」であったが、今でも暗唱できる。九歳とはいえ、詩に描かれている夏と愛の目覚め（思春期の始まり）は、分区分園での夏の経験と重なり、それを見事に表現するものであった。収録されていたその他の詩はあまり覚えていないが、詩集自体は自分史の一瞬をとらえているものなので、日本にも持ってきた。

そして日本で、この詩集が母の受けていた一九六〇年代の社会主義教育の高学年国語の教科書であったことに気づいた。社会主義者によつて作られた詩を「三世紀に亘るドイトン」の歴史に位置づける本であった。私が暗記した詩は、東ドイトンの新体制における新しい人間の目覚めを語るものとされていたかもしれないが、そこにある「愛」と「目覚め」とは、時代と文化やイデオロギーなどを超えて語り続けられている。ああ、今の自分でもう一度読みたくなった。

（立教大学文学部キリスト教学科教授）



香港のキリスト教を知るには

▼この三冊！

松谷曄介

(まっつたに・ようすけり金城学院大学宗教主事・准教授／日本基督教団教務教師)

にとの編集委員会の意向があるものと受け止めています。

しかし、「香港のキリスト教」そのものを取り上げた日本語書籍は拙編訳書以外にはないため、ここでは、香港のキリスト教の〈背景・文脈〉を知るのに役立つ三冊を紹介させていただきます。

野嶋剛『香港とは何か』

まず、入門書としてお勧めなのが、ジャーナリストの野嶋剛氏のこの本です。専門書ではなく一般向けの新書なので、値段・内容・分量の面からみて、香港について最も読みやすい近著といえるでしょう。野嶋氏は『台湾とは何か』(ちくま新書、二〇一六年、第11回樫山純三賞)の著者でもあり、さまざまな報道番組のコメンテーター、雑誌記事のライターとしても定評があり、その意味でも同書は信頼のおける一冊

二〇二〇年六月三日の「香港国家安全維持法」(国安法)可決・施行から、一年が過ぎました。この間、民主派の人々の逮捕・起訴が相次ぎ、香港から海外への移住者が後を絶ちません。こうした事態は深刻さを増していますが、日本ではコロナや五輪のニュースの陰に隠れてしまい、香港関係の報道がかなり減ったように思います。

とはいえ、「雨傘運動」(二〇一四年)、「逃亡犯条例改正反対運動」(二〇一九年)、「国安法」(二〇二〇年)など一

連の出来事を通して、この数年で日本における香港への関心度・注目度は、以前と比べればかなり高くなったことは間違いありません。香港についての書籍も相次いで出版されるようになり、今年初めには拙編訳書『香港の民主化運動と信教の自由』(教文館、二〇二一年)も出版されました(五月末に重版!)。『本のひろば』編集委員会より「香港のキリスト教を知るための三冊」の紹介の依頼があったのも、香港への関心と祈りの輪がより一層広がるよう

です。

まず第一章で香港の概説と執筆動機が紹介されていますが、著者が大学生時代に香港経由で中国大陸に聖書を運ぶ活動に参加した体験談から記述が始まっているのは、とても興味深い点です。香港という都市が、キリスト教宣教においても役割を果たしてきたことを物語るエピソードと言えるでしょう。

第二章から第四章で香港人アイデンティティ、雨傘運動(二〇一四年)、逃亡犯条例改正反対運動(二〇一九年)について、一連の流れがわかりやすく説明されています。

第五章は、香港映画からみた香港史というユニークな視点から解説がなされ、映画好きの方には特にお勧めの一章です。

第六章から第八章は、日本・台湾・中国大陸のそれぞれの視点から見た香港が論じられています。日本が、中国

大陸・台湾・香港と、政府レベルでも

民間レベル(キリスト教会の交流も含め)でも、どのようにバランスをとりながら関係を築いていくのかは非常に難しい課題ですが、まずはそれぞれの異なる視点・立場を理解しておくことは必要不可欠です。

そして最後の第九章「香港と香港人の未来」では、国安法をめぐる問題と、東アジアの中での香港、米中関係の中での香港などさまざまな角度から、今後考え得るさまざまなシナリオについて論じられています。

「あとがき」の中で著者は、国安法の浮上により「本書のタイトルを『香港とは何か』から『香港に希望はあるのか』や『香港の絶望』に変えようと思った」と述べつつ、それでも「香港は死なないし、終わらないと信じたい」という強い信念から、タイトルを変えなかつた思いを綴っています。

ジョン・M・キャロル『香港の歴史

——東洋と西洋の間に立つ人々』

次に、香港の通史を学びたい方には、ジョン・M・キャロル(John M. Carroll)の同書がお勧めです。著者は香港大学文学部歴史学科教授で、香港史やイギリス帝国史を専門としています。が、幼少期から高校卒業まで香港で育った経験を持っており、香港の歴史や文化を肌感覚で知っている研究者と言えます。

訳者による「あとがき」で指摘されているように、日本にはそれまでも香港研究の蓄積がありました。客観的に通史を書くことは非常に困難な作業であり、同書の出版以前には『香港の歴史』と題する専門書は日本で刊行されていませんでした。従来の香港史の研究には、①香港をイギリス植民地の一部として叙述する方法、②中国史の一部として描く研究、③香港の独自性

を主張する「香港史」志向の研究の三つの傾向があり、これらのバランスをとることは容易ではない中、キャロルの本書はこれら「三つの視角」を良く考慮し、多角的に香港史を描くことに比較的成功している、と訳者は指摘しています。

本書には、一九世紀の中国宣教のパイオニアであるロバート・モリソン (Robert Morrison, 1782-1834) やジェームズ・レッジ (James Legge, 1815-1897)、一九四九年以降に中国大陸から香港に移住し、香港の貧困問題に取り組んだ宣教師・教育家・社会活動家のエルシー・トゥ (Elsie Tu, 1913-2015; 中国語名≡杜葉錫恩、英語本名≡エルシー・エリオット [Elsie Elliot])、また八〇年代の政治改革に積極的に参与した香港キリスト教工業委員会 (Hong Kong Christian Industrial Committee) への言及が見られ

ます。著者が香港で幼少期から青年期を過ごしたことは先に紹介しましたが、実は彼の父親ユーイング・W・キャロル (Ewing W. Carroll, 1937-、中国語名≡高佑恩、Bud Carroll) の愛称で知られる) はアメリカ合同メソジスト教会から香港に派遣されていた宣教師でした。また彼はあるインタビューの中で、自身の博士課程当初の研究関心は中国における宣教師の歴史だったとも語っています。同書の中にキリスト教への目配りがなされているのは、著者のこうした背景が影響しているのかもしれない。イギリス植民地だった香港の歴史を理解する上で、キリスト教の影響はやはり無視するわけにはいかない視点と言えるでしょう。

さらに本書が、日本の香港研究を牽引する倉田明子氏 (東京外国語大学総合国際学研究院准教授) と倉田徹氏 (立教大学法学部教授) という最適な訳者

によって翻訳されたことも、指摘しておかねばなりません。お二人の共編『香港危機の真相』(東京外国語大学出版会、二〇一九年) や、倉田徹・張彥馨共著『香港——中国と向き合う自由都市』(岩波新書、二〇一五年)、吉川雅之・倉田徹共編『香港を知るための六〇章』(明石書店、初版二〇一六年、第四版二〇一九年)、倉田徹編『香港の過去・現在・未来』(勉誠出版、二〇一九年) なども、香港を知るためには欠かせない本です。

渡辺祐子監修『増補改訂版 はじめての中国キリスト教史』

最後にご紹介するのは、筆者を含めた複数の著者による「中国キリスト教史」の概説書ですが、その中でコラムとして「香港のキリスト教」(筆者と倉田明子氏で分担執筆) に七頁分を割いています。

香港史を書くのには「イギリス植民地」「中国史」「香港の独自性」という「三つの視角」のバランスが難しいことについて先に触れましたが、このことは「香港キリスト教史」の叙述においても同様です。「中国キリスト教史」の中に「香港キリスト教史」をどのよう位置づけるかは決して自明のこと

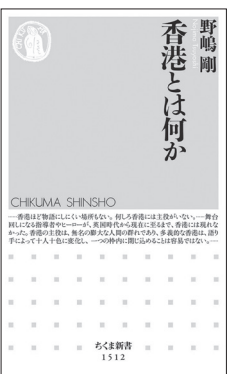
ではなく、筆者自身も悩むところです。中国大陸と香港は政治・経済・文化等の面で切り離せないのと同様に、両

者のキリスト教を「分離」するわけにはいきませんが、しかしそれらを「区別」して考えることが不可欠です。中国大陸のキリスト教と香港のキリスト教は、「区別されるが分離されない」ことを念頭に置きながら、同書を読んでいただと良いでしょう。

以上、三冊の本を紹介させていただきましたが、これらはいずれも、「香港のキリスト教」に焦点を当てた書籍

『香港とは何か』

野嶋 剛：著
筑摩書房
2020年刊
新書判 256頁
924円 (税込)



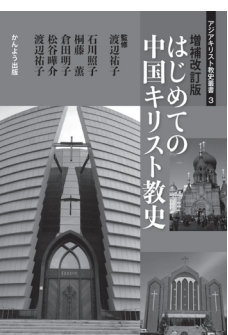
『香港の歴史』

東洋と西洋の間に
立つ人々
ジョン・M・キャ
ロル：著
倉田明子、倉田
徹：訳
明石書店
2020年刊
四六判 440頁
4730円 (税込)



『増補改訂版 はじめての中国キリスト教史』

渡辺祐子：監修
石川照子、桐藤
薫、倉田明子、
松谷暉介、渡辺
祐子：著
かんよう出版
2021年刊
四六判 254頁
2200円 (税込)



旬のものに、よみがえる

〔評者〕 上林順一郎



信仰生活ガイド
信じる生き方
増田 琴編
深田未来生、左近 豊、
奥田知志、月本昭男他著
増田 琴編



出版された多くの本の内、半分は売れない。売れた本の内、半分は読まない。読まれた本の内、半分は再び読まれることはない。ヨーロッパで語られる言葉だそうです。もしこれが事実だとすれば、本の運命とはなんと儂く、哀しいものかと言わざるを得ません。

それはともかく、昨今の出版業界は危機的状況にあるようです。若者の活字離れ、パソコンやスマートフォンで本や漫画が読める、書店で買わなくてもネットですぐに手に入る、書店も本の販売数が減り、価格も高くなり、ますます売れなくなる……こうした苦しい事情があるようです。

これは一般書籍の話ですが、キリスト教書の状況はさらに深刻です。読者となる教会の信徒数は年々減少し、かつて盛んだった教会での神学読書会や勉強会も少なくなり、さらに買い手である教職者や神学生の数も減少する一方で

て発行されました。編者の経堂緑岡教会牧師の増田琴さんは「まえがき」で書いています。「信じる生き方は豊かです（中略）信じる生き方が豊かなのは、『伴走者』の存在があるからだと思います。『伴走者』はある時には隣人であり、ある時には書物でもあります」

さて本書は第一部「神と共に歩む」、第二部「魂に向き合う」、第三部「隣人と生きる」をテーマとしてかつて一〇年の間に書かれた内の十三編の再録と書き下ろし一編が収録されています。一編一編の内容について紹介する余裕はありませんが、いま読んでもこの時代、この社会に生きている私たちに生き生きと語りかけている文書です。まさに「旬のものに、よみがえった」本です。

特に今回発行された「信じる生き方」は、新型コロナウイルス

す。しかも一般書籍に比べて価格が高すぎるなどなど、いまの状況が好転する気配は見えません。同じ出版物でも雑誌はもつと悲惨です。時代の流れや社会状況、時の話題に依っていかなければ見向きもされません。雑誌はいうなれば「旬のもの」で、旬が過ぎれば再び読まれることなどまずないのです。

こうした雑誌の宿命（？）に挑戦したのが日本キリスト教団出版局の「信仰生活ガイド」と題された五巻のシリーズ本です。各巻の内容の多くは月刊誌『信徒の友』にかつて掲載され、好評であったものから選別され、さらに「書き下ろし」を加えて編集されています。言ってみれば読み捨てられることの多い雑誌の文章をもう一度「旬のものに、よみがえらせる」という冒険（？）に挑んだのです。

今般、そのシリーズの最終巻が「信じる生き方」と題し感染が収束を見せないなかで孤独や差別に苦しみながら毎日を過ごしている人々、老いの日々の辛さを嘆いている人々、愛する人を亡くして悲嘆にくれている人々、生きる意義を見出せず一人で重荷を背負っている人々の「伴走者」となり、その苦しみを一緒に担いながら走ってくれる励ましと慰めの書といえます。

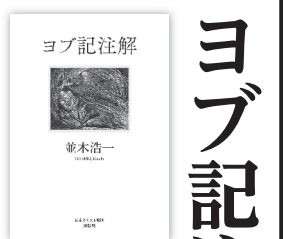
とはいえ出版不況の波はなお続くことでしょう。しかし、モノは考えよう、ホンは作りようです。「出版された本の内、半分も売れる！ 売れた本の内、半分も読まれる！ 読まれた本の内、半分も再び読まれる！」

再び読まれる機会の少なかった文章が「旬のものに読みがえる、いや魅る」未来はきつと明るい！?

（かんばやし・じゅんいちろう）日本基督教団教師

（四六判・一二八頁・定価一四三〇円・日本キリスト教団出版局）

苦難と自由の本質に挑む、
並木旧約学の集大成！



ヨブ記注解 並木浩一

国際基督教大学名誉教授

好評
発売中

正しい人がなぜ苦しむのか。神はなぜ悪を許容するのか。ヨブ記は人間が自由を持つがゆえの苦悩を徹底して描く。思想世界に深く切り込み、ヨブと共に苦難の意味と人間の自由を問い直す勇気が与えられる注解書。A5判・482頁・定価6600円



本書はヨブ記の意味と意図について、最新にして最高の見解を提示します。ヨブ記に関心を持つ読者にとって長く読みつがれる最良の注解書になるでしょう。

推薦の言葉

小友 聡

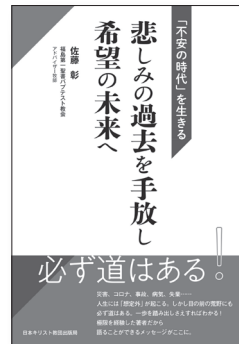
東京神学大学教授、日本基督教団中村町教会牧師

【購入者特典】先着300名様に『ヨブ記 並木浩一訳』冊子進呈
本書のヨブ記翻訳をまとめた冊子をプレゼント。カバーについている応募マークを切り取り、はがきに貼ってご応募ください。

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail: eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格10%税込》
<https://bp-uccj.jp>

コロナ禍で苦しむ時代への 神からの贈り物

〈評者〉 千田次郎



悲しみの過去を手放し 希望の未来へ

佐藤 彰著



東日本大震災から一〇年。まだ復興の途上にある今、今度は世界中がコロナ禍で苦しんでいます。この本を読んで、「これこそ、コロナ禍で苦しむ人々への神からの贈り物だ」と思いました。この著者にしか書き得ない神からのメッセージがここに記されているからです。この苦しみをどのように受け止めて生き、乗り越え、希望の未来に進んでいけるのか。そのための神からのメッセージがこの本の中に凝縮していると思いました。

東日本大震災で最も大きな被害を受けた教会は福島第一聖書バプテスト教会だと思えます。被害に遭った教会は他にもありましたが、みな今までの地域に再建できました。しかし、福島第一聖書バプテスト教会は教会が立っていた地域自体が失われ、いまだに帰ることができないのです。一九七九年の春、福島第一聖書バプテスト教会の役員の一

地域も教会も失われてしまったのです。

震災の当日、千葉にいた佐藤牧師は教会員と一緒に避難しているとの情報を得、会津チャペルで約七〇名の教会員と合流しました。さらに米沢に、そして奥多摩福音の家へと導かれて安息の場を得、一年後の二〇一二年四月に故郷から南へ約五〇キロのいわき市に戻り、教会を再建しました。その記録がこの本の前半です。

この厳しい試練をどのように乗り越えることができたのか。それは聖書の福音に身を委ねることによってと教えられます。大震災からいわき市に戻るまでの一年間が大きな恵みの転換点になっていると記されます。何もかも失って、むしろ決して失われない本質的なものが鮮明になり、何もかも失ったと思ったら神の愛が自分を覆っている、教

方々が我が家に来られ、無牧になった教会を月に一度、土日に来て役員会と礼拝を導いていただきたいと要請され、一九八二年春までの三年間助言牧師として任せさせていただきました。その時主から「この教会は可能性に満ちている」と告げるようにと示され、行くたびにこの言葉を告げました。無牧になり落胆していた教会員は当初、誰も信じませんでした。しかし二年半たった頃、雨後の筍のように、皆さんの口から「私たちの教会は可能性に満ちている」という言葉が溢れ出しました。これで私の使命は終わったと確信して、佐藤彰牧師を推薦させていただきました。

やがて教会は同牧師を迎え、素晴らしく成長し、人口約一万人の田舎町で、同牧師が遣わされた時約二〇名だった聖徒の群れが、二九年間で約二〇〇名の群れになっていきました。しかしその時に東日本大震災が襲い、一夜にして

会が消滅したと思ったら教会は残っており、より本質的な教会として脱皮している……。著者は「いのちが与えられていて、イエスを信じていれば完璧」と表現しています。佐藤牧師は大震災での経験をすぐコロナ禍への対応へと導き、コロナ禍を「黄金の冬ごもり」の安息の年、ヨベルの年と位置づけ、福音をさらに深く体験する機会ととらえています。大震災で、最悪の中に最善が備えられている恵みの体験をしました。なので、コロナ禍を大きく変換される未来に向けて進んでいくための旅支度の時としてとらえ、最悪の後には必ず最善が備えられていると信仰の告白をしています。主の証人として、福音、教会、遣わされている社会への再考を迫られる恵みの書です。

(ちだ・じろう) 恵泉キリスト教会バルナバ牧師 (四六判・八〇頁・定価九九〇円・日本キリスト教団出版局)



CATS 日本キリスト教会 大信仰問答

〈ビジュアル版〉

日本キリスト教会*著



日本で書かれた 「信仰問答」!

「読みやすく、楽しく手に取れるように」と企画されたカテキズム。写真、絵画、イラスト満載。総ルビ、オールカラー。

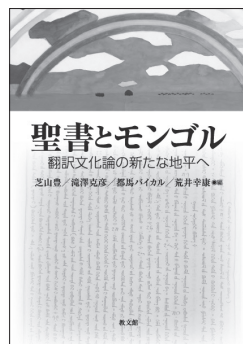
A5判変型
定価 1980 [本体 1,800 + 税] 円
ISBN978-4-86325-129-8



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

知られざる歴史をたどる 聖書翻訳のあり方を考える

〈評者〉 月本昭男



聖書とモンゴル
翻訳文化論の新たな地平へ
芝山 豊、滝澤克彦、
都馬バイカル、荒井幸康編



本書の表題に意外な感じを抱く人は少なくないだろう。モンゴルと聞けば、大草原を思い浮かべ、チンギスハンや大相撲の力士の名が口をついて出ても、キリスト教との関連に思いをはせる人はまずいない。本書をひもとく者は、それゆえ、モンゴルとキリスト教との深い関わりに、モンゴル語聖書翻訳の歴史に、いたく驚かされるにちがいない。評者もその一人であった。

もつとも、七世紀にネストリウス派が景教として唐に伝えられたことを思えば、大帝国成立以前のモンゴルにキリスト教が伝わっていても不思議ではない。本書第一章「モンゴルとキリスト教——近代以前」（芝山豊）は、そのようなモンゴルとキリスト教との関係史を詳しくあとづけ、モンゴル大帝国の成立さえもがキリスト教と無関係ではなかったことを具体的に教えてくれる。

第二章以下には、表題に示された、聖書のモンゴル語翻訳をめぐる一〇の諸論考が連なり、そこに池澤夏樹「世界文学としての聖書と翻訳」、山浦玄嗣「聖書のケセン語訳から見えてきた日本の翻訳文化」が、さらに仏典のモンゴル語訳論（金岡秀郎）、フランシスコ会邦訳聖書をめぐる報告（小高毅）が添えられる。

新約全書がカルムイク語と狭義のモンゴル語とに翻訳され、刊行されたのは一八二七年、旧約全書のモンゴル語訳出版は一八四〇年であった。日本における最初の『新約全書』（一八八〇年）と『旧約全書』（一八八七年）に半世紀ほども先立つ。その後も、聖書のモンゴル語訳（改訳）事業は続けられた。それは西欧諸国によるキリスト教宣教師活動と連動していたが、本書は聖書翻訳に携わったモンゴル人たちを紹介することも忘れない（第六章）。一九二四

年にはじまる「社会主義」時代、モンゴルにおける宣教師活動は困難をきわめた。一九九〇年の「民主化」以降は、ふたたびキリスト教宣教師活動は活発化し、あらたな聖書翻訳も様々に試みられている。いまや、モンゴルにおけるキリスト教徒は一〇万人前後、人口比では、日本の一パーセントをしのぎ、三〜四パーセントにおよぶという（九五頁）。本書は、しかし、モンゴルにおける聖書翻訳史を紹介するにとどまらない。独自の自然風土と生活様式と文化伝統をもつモンゴル社会における聖書翻訳の可能性が、その困難さとともに、多角的に論じられている。そこには、たとえば聖書が語る「神」はあるいはイエスが教えた「愛」は、モンゴル語でどのように表現すべきか、といった具体的な課題が横たわる。それは漢訳、邦訳、韓訳聖書が経験した

問題と重なる。さらに、信仰の規範となる聖書の翻訳は、訳語の問題とは別に、基本的な翻訳理念と無関係ではありえない。聖書の翻訳とも深く関わる翻訳論上の課題がそこに浮かび上がる。本書の副題が「翻訳文化論の新たな地平へ」とされた理由もそこにあるだろう。本書はモンゴル語聖書をめぐる学際的な共同研究の成果であり、モンゴル人研究者もこれに加わる。研究会を重ね、本書を編まれた方々への敬意と感謝をもって拙い紹介とさせていただきます。

（つきもと・あきお 上智大学神学部特任教授、古代オリエント博物館館長）

（A5判・三四二頁・定価三五二〇円・教文館）

新刊

ヒッタイトの歴史と文化
忘れられた帝国への扉

THE HITTITES AND THEIR WORLD

ヒッタイトの歴史と文化

前2千年紀の忘れられた帝国への扉

B・J・コリンズ [著]
A・T・コヘン [日本語版監修]
山本 孟 [訳]

- A5判上製 328頁
- 定価3,300円(税込)

20世紀初頭にアナトリアで発見された「ヒッタイト帝国」の概説書。発見の経緯、研究史、千年間におよんだ「ヒッタイト」の歴史・社会・宗教を簡潔に述べる。また、ヒッタイト研究が聖書の解釈にいかに関与するののかについて、最新の研究を含めながら包括的にまとめる

ISBN978-4-86376-088-2

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

死を越えた
真の幸福への道案内

〈評者〉芳賀 力



キリスト教の死生観
上田光正著



本書のタイトルは『キリスト教の死生観』であるが、キリスト者だけでなく、広く一般的な読者に訴えかけ、聖書的な死生観の持つ意義を高調しようとするものである。手がかりは「幸福論」である。幸福論はギリシア哲学に由来する主題だが、現代人の関心をも呼び起こす普遍的な主題なので、格好の入り口と言えるだろう。世俗的な幸福論が底の浅いものに終わっているのは「死を越えた向こうまで考えられるところの宗教的な次元」（四頁）を考慮に入れないからである。だから死生観と銘打たれる。本書ではまず議論の大前提となるキリスト教的な神とはいかなる方かが論じられる。唯一神信仰は、人間が主体である拝一神信仰とは違い、主体である神の啓示によって生まれた信仰である。神は創造者であり、人間はその被造物である。そこに契約関係が生まれる。神は、神から離反した人間を

永遠の命に与らせるために、御子と聖霊を通して贖いの業を行う。

続いて、人間はどのような存在として造られているのが論じられる。創造の究極の目的は神と人間との永遠の交わりである。しかしなぜ有限である人間が神の永遠性に与ることができるのか。著者はその答えを、人間だけが長期記憶能力を付与された存在であるという点に見出す。アウグスティヌスは、過去を記憶し、現在を直視し、未来を期待する精神の働きを重視した。人間は過去の体験を時系列で並べて記憶することで時間意識を持ち、更に責任意識を持ち、罪や死を理解する。しかし人間の記憶は死をもって終わる。この有限性を克服するものは神の記憶である。「神が彼の魂のことを永遠に御記憶の中に留め置いてくださるのであれば、その限り、彼は神の中で生き続けている」（八

頁）。

六頁）。そしてこの神の記憶に与る上で重要なのが罪の赦しである。

著者はバルトの贖罪論を、刑罰代受説を徹底させた審判代受説であると見る。イエスの裁判において最後の審判は既に下された。私たちはただこの事実を受領し応答するだけでよい。「もし信じるなら救われる」と語るなら、私の信仰が救いの条件になるという誤解を招く。キリストによる最終審判がなされたことにより、死はもはや呪いの死ではなくなる。死は永遠の生命への通過点、天国への門となった。伝道する教会の時（中間時）とは、「（存在的な）和解の（認識的な）啓示が進展し、つつある時」（一九五頁）である。できればこの点で、バルトでは万人救済説にならない

いかとの批判に存分に論駁していただけたら良かったかと思う。人間は死を越えて永遠の生命へと招かれている。それを知らず、その中に神によって造られた人間の真の幸福がある。

本書には、自前の思索と言葉で想を練り、分かりやすい表現を見出そうと努める粘り強い著作家の姿勢が窺える。そこにはこの地球大の危機の時代に、キリスト教の垣根を越え、何としても福音を広く伝えようとする、長い経歴を重ねた伝道者の願いが込められている。

（はが・つとむ 東京神学大学学長
（四六判・三三〇頁・定価二七五〇円・教文館）

ヨベルの新刊案内

大頭と眞一 焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇④
聖なる神の聖なる民 レビ記
待望の最新刊！

「聖者」って、ざいよう っていうよりか、はみ出すほどに激しく愛しちゃっ人。

神の民の旅路は、世界的危機の時代に生きる私たちにあって無視できない鮮烈な表象に満ちている。現代人の生き方に向き合おう。語るか、激闘するパスター・オオズの第4弾。新書判・一二二〇円

北尾一郎 「神の民」としての教会
LAOS 神の民
待望の最新刊！

「神の民」としての教会の形成。牧師、司祭の不足と停滞に活路！

「神の民」としての教会ミッション。マインドからの再起動を！

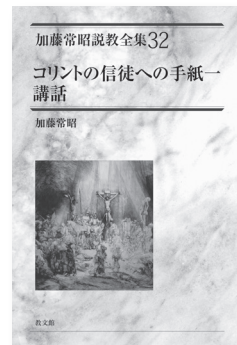
神の民概念の回復 神の民の「教会」の形成。「ミッション」としての教会の質の回復。

AS判・七三頁・定価八八〇円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL.03(3818)4851 FAX.03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

福音の喜びにあずかる

〔評者〕 福嶋裕子



加藤常昭説教全集32
コリントの信徒への
手紙一講話
加藤常昭著



どうしてもこの人の説教集は読んだほうが良いと思える。何故なのだろう。そんな不純な動機で、この本を手にした。不純というのは、この説教者の秘密が知りたいからである。ここに記された説教がなぜ素晴らしいのか、それがわかれば自分も「優れた説教」ができるようになるのではないかと、これは下心の部類であって説教を聞く者の態度ではない。それは承知していても、不肖の教え子が、高座にのぼった師匠の手元を幕の陰から覗きこむような気持ちになかったとは言い切れない。

じつは本書は『コリントの信徒への手紙一講話』というタイトルが示すように教会の礼拝での説教ではなくて、FBCラジオ放送の番組での講話である。だがそれは間違いない。「説教」として語られたもので、説教者は小さなカードに要点を記し、しかしそのカードを頼りにするというよ

り、目の前の聖書とデジタルの時計を見ながら、マイクの向こうで耳を傾けてくださる一人ひとりの姿を思い浮かべながら語りかけたのだという。これは苦行ではないだろうか。

説教者は、文字となった原稿を読み返すとなくかしく楽しいときだったと「あとがき」で述べているが、聴衆の反応を肌で感じることなく話し続けるためには、それ相応の覚悟とさらには経験に裏打ちされた熟慮が必要だと推測する。この語りかけを「聖霊の導き、み言葉の導きを信じて。かけがえのない時でした」と説教者は述べるが、その裏にどれだけの祈りと黙想と研鑽のときがあったことかと思う。個人的に好きだったエピソードは「トップドッグとアンダードッグ」(五四頁)、それと「熟練した建築家」(九四頁)。笑う箇所ではないが、どちらも心のなかでクスリと笑って

しまい忘れることができない。淡々とした口調にのせられぬか喜びするアンダードッグや冴えない建築家の姿を思い浮かべたところでピシヤリとやられてしまった。

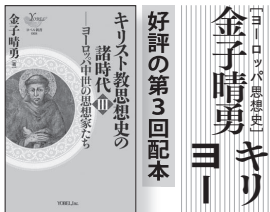
読み進めながら、どれも心に沁みる。これも私のお気に入り紹介になるが、「すべては私たちのもの」というタイトルの説教は、波のように寄せては引くロジックの中で「一切はキリストのみ手のなかにあります」という短文がキユッと全体を締めて結論部分に入っていく、どこまでも驚くべき「神の恵み」が語られ、祈りにみちびかれる。

パウロ自身がときに福音の喜びにかられ、ときに自分の心を痛めつつも教会員の罪を厳しく責めたて、呻吟するよ

うにして口述筆記された手紙の緩急をそのままに伝えるような説教者の語り口である。コリントの信徒への手紙一には聖書学者の議論が百花繚乱で収拾がつかない部分も少なくない。しかしまた、かの有名なともいべき「愛の賛歌」もこの手紙に収録されている。ジェットコースターのように山あり谷ありと現れてくる問題箇所を頭で解説するのはなく、説教者の思索と経験と祈りに誠実に照らし合わせ、共に福音にあずかることの畏れと喜びの刻印を確実に残していく説教と祈りの言葉をおさめた書である。

(ふくしま・ゆうこ) 青山学院大学宗教主任・理工学部教授
(四六判・四五四頁・定価四二九〇円・教文館)

ヨベルの新刊案内



ヨベル ロックパ思想史
金子晴勇 キリスト教思想史の諸時代
ヨールロップ中世の思想家たち

好評の第3回配本
キリスト教思想史の諸時代の
ヨールロップ中世の思想家たち
霊性の深まりと共に拓かれていった神秘思想
神学大系の構築など、キリスト教思想が大きく花開いたこの時代を探訪！
諸聖人の頂点に立つフランチェスコについて「聖性とは焼き尽くされた偉大さである」と言われる。中世思想家たちの霊性的特質を探る。 新書判・二七二頁・一三二〇円

キリスト教思想史の諸時代 全7巻別巻2

- I 『ヨールロップ精神の源流』〔既刊〕
- II 『アウグスティヌスの思想世界』〔既刊〕
- III 『ヨールロップ中世の思想家たち』〔新刊〕
- IV 『エラスムスと教養世界』〔次回配本〕
- V 『ルターの思索』
- VI 『宗教改革と近代思想』
- 別巻1 『現代思想との対決』
- 別巻2 『アウグスティヌスの霊性思想』

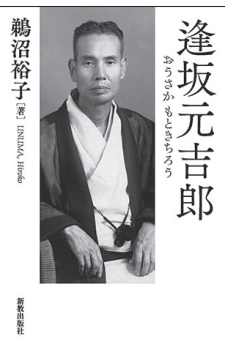
新書判・平均256頁
各巻1,320円

【ご予約受付中】 8月末刊行予定
金子晴勇 東西の霊性思想
キリスト教と日本仏教との対話
四六判上製・272頁・予価1,800円＋税

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

逢坂の生き方と 思想に迫った力作

〈評者〉鈴木範久



逢坂元吉郎
鵜沼裕子著



以前、『信教自由の事件史』（二〇一〇）および『日本キリスト教史』（二〇一七）の執筆にあたり、逢坂元吉郎の「殴打事件」も加えるつもりだった。『読売新聞』の宗教欄の論説担当時代、神宮奉賛会によって連れ去られ重傷を負った事件である。ところが、調べ始めたところ、どうしても事件の日時がわからない。当の『読売新聞』にも記されていない。この入り口で躓いたまま年月が経ってしまった。入り口における躓きは、逢坂の思想の中へ立ち入ることの躊躇にもなった。

まだプロテスタント史研究会が飯田橋の富士見町教会で開催されていたころ、逢坂元吉郎に関する研究発表を聞いた記憶がある。その発表者が石黒美穂氏であったか、それとも本書の執筆者である鵜沼裕子さんだったかどうか、これも定かでないが、少なくとも鵜沼さんが出席していたこ

とだけは記憶に残っている。ただし、逢坂の神学思想は難解で、充分には理解出来なかったように思う。

その鵜沼さんにより、このたび単著『逢坂元吉郎』が一冊としてまとめられたので、いっきに読了した。力作である。逢坂の思想は難解だが、本書により、はじめて逢坂の生き方と、その根底にある思想の一端に触れ得たような感じがした。ここに、それをまとめる能力も意図もないが、少なくとも日本のキリスト教史、特にその思想史においては充分特筆されるべき人物であると思った。

逢坂の到達した思想と実践は、ルターの宗教改革とプロテスタンティズムの影響下にある日本のプロテスタント教会には、きわめて異質で、むしろ原始キリスト教あるいは初期のカトリックに近いものともいえよう。しかも、そこには主客分離を認めない禅仏教および西田哲学の影響が濃

厚である。逢坂は、金沢に住んでいた学生時代、西田幾多郎が塾長格をつとめていた三々塾で生活。逢坂と西田とは終生、交流が続けられる。当時、この塾には、のちに有数のプロテスタントの牧師として活躍する、高倉徳太郎、富永徳磨、秋月致という青年たちもいたから驚く。ちなみに私の聞いた説教のなかで、未だ心に強く残っている話は秋月致によるもので、そのときの秋月の風姿は記憶に強く焼きついている。

鵜沼さんの本書は、はじめに述べた殴打事件により身体に大きな傷を受けた逢坂が、キリスト教理解と実践にも大変化をもたらす過程を、くまなく叙述。その叙述にあたり、さすが鵜沼さんだと感じ入る点は、ただの神学者と異なる幅広さである。西田哲学はもとより、西田の友人の鈴木大拙（やはり金沢出身）の霊性論への言及など、奥が深い上に幅が広い。

本書を読みながら、逢坂の日本のキリスト教史における位置づけを考えると、私には、柳宗悦が著書『南無阿弥陀仏』でいう、法然でもなく親鸞でもない、すなわち一遍の

ような気がしてきた。それも踊り念仏の一遍ではない。人から妻帯を問われ、自分は親鸞と異なり、妻帯しながらも信仰を維持できるほどの人物でない、と妻帯を峻拒した一遍である。法然や親鸞をプロテスタントの位置に置けなければ、それに基づきつつ、さらに厳しい生き方を示した一遍と逢坂の姿が重なった。

最後に、わたしの回想が若き日の著者に及ぶことをお許し願いたい。はじめて出会った教室には学生は一〇名ほどいたであろうか。著者はまだ旧姓で倫理の研究室から参加していた。周辺に気配りしつつも質すことは質していた。西洋古典からは、田川建三さんも来ていたが寡黙な学生だった。それから六十数年の歳月が流れた。

（すずき・のりひさ 立教大学名誉教授）
（四六判・二三八頁・定価二四二〇円・新教出版社）

和解と一致の福音

〈評者〉片柳弘史



心の垣根を越えて
テゼのブラザー・ロジエ
——その生涯とビジョン
キヤスリン・スピנק著
打樋啓史、村瀬義史監訳



テゼのブラザーや、本書の訳者である植松功氏、打樋啓史氏の指導による「テゼの歌」を用いた祈りの集いに参加させていただいたことは何度かあり、テゼの創立者であるブラザー・ロジエの名前は知っていた。今回、この本を通してその生涯と思想にふれる機会をいただいたことに、心から感謝している。

ブラザー・ロジエという一人の人物の生涯を克明に描いた本書は、20世紀ヨーロッパにおいてエキュメニズムがどのように受け入れられ、広がっていったかをわたしたちに生き生きと教えてくれる。第二次世界大戦開戦直後のフランスで、「なぜ人類はこのように対立し、争わなければならないのか。とりわけ、なぜキリスト者がそのようにしているのだろうか」と深く自問したブラザー・ロジエが始めた和解の共同体、テゼは、若者たちの心を強く惹きつけ、

毎年何万人もの若者たちが全世界から集まる一つの「巡礼地」のようになっていった。それは、多くの若者たちが、ブラザー・ロジエと同じように、対立や争い、とりわけキリスト教徒同士の対立と争いとうんざりしていたことの証拠だろう。兄弟愛やゆるしの大切さを説きながら、「わたしたちが正しい、あなたたちは間違っている」と互いに裁きあい、軽蔑しあうキリスト教徒の姿に、若者たちは深く失望していたのだ。ブラザー・ロジエが作った共同体は、そんな若者たちにとって大きな希望の光となった。テゼの共同体は、イエス・キリストが説いた和解と一致の福音を、20世紀によみがえらせたと言ってもいいだろう。

テゼの共同体、そしてブラザー・ロジエに希望を感じたのは、若者たちだけではなかった。マザー・テレサの伝記作者として世界的に有名な本書の著者、キヤスリン・スピ

ンクは、徹底的な取材に基づいて、ブラザー・ロジエと歴代の教皇たちとの間に生まれた深い信頼関係も生き生きと描き出している。第二バチカン公会議を提唱したヨハネ23世、公会議を主導したパウロ6世、公会議の精神を次々と具体化していったヨハネ・パウロ2世など、歴代の教皇たちも、テゼとブラザー・ロジエに大きな希望を感じていたのだ。ヨハネ23世は晩年、「ああ、テゼ、あの小さな春の訪れ」と語り、パウロ6世はブラザー・ロジエに「青年たちを理解する鍵を持っているなら、それをわたしにください」と懇願したという。

マザー・テレサとブラザー・ロジエの間に結ばれた信頼と友情の絆についても詳述している。争いと貧困の中で傷ついた人々に寄り添ったマザー・テレサも、キリスト教徒同士のあいだにさえ争いがあり、それによって傷つく人たちがいることに耐えられなかったのだろう。共同で出したアピールの中で、「互いが異なっているなかで、誰が正しく誰が間違っているかを見つけようとすることに、何の意味があるのか」と訴えたという。本心に正しいのはイエス・キリストお一人だけ。わたしたちはみな、不完全な罪人にすぎない。それが、この二人の共通の確信だったのだ。

テゼの魅力がエキュメニカルな性格にあることは間違いない

ないが、テゼの最大の魅力は「祈りの力」だとスピנקは分析している。繰り返される短い歌と、それに続く深い沈黙、その中でイエス・キリストご自身が祈るといふのだ。テゼでは、「祈ることができない」と悩むことがない。なぜなら、わたしたち一人ひとりの内で、イエス・キリストが祈るからだと言ふスピנקは言う。

ブラザー・ロジエは、必ずしも世間的な意味で有能だったわけではない。むしろ多くの弱さを抱え、失敗を繰り返しながら、それを力に変えて進んできた人物だ。「最も辛い出来事によっても、何かを築くことができます。喜ばしい出来事だけでなく、最も耐え難い状況、また失敗さえもが、私たちを前進させる力になりうるのです」というブラザー・ロジエの言葉が、深く心に刺さった。聖書が伝える弟子たちの歩みからも明らかのように、神は、人間の弱さや失敗の中からさえ、よいものを作り出すことができなくなる方なのだ。この本はわたしたちに、和解と一致への希望だけでなく、どれほど困難な状況にあっても希望に向かって進んでゆく力を呼び起こしてくれる本だと言っている。この本と出会ったことを心から感謝したい。

(かたやなぎ・ひろし)イエズス会司祭

(A5判・二五六頁・定価三〇八〇円・一麦出版社)

信仰生活の
共同体的実践の指南書

〈評者〉阿部仲麻呂



小笠原優著

信仰の神秘

小笠原優著



1. 「キリスト教的人間論」に立脚する「教会論」および「秘跡論」

フラ・アンジェリコ作「受胎告知」における聖母マリアの顔を表紙とする小笠原優師（一九四六年―）の新著『信仰の神秘』は、私たち人間が神に対していかに応えるのかを再認識するための驚嘆すべき洞察の宝庫である。本書はカトリック信仰の立場の普遍性と地域性との一体と個別とを見事に体現した作品である。キリスト教二千年の信仰伝承の普遍性に則りながらも日本の司牧現場での人びととの出会いに開かれた地域性に根差した教会生活の手引書だからである。前著『キリスト教信仰のエッセンスを学ぶ』（イー・ピックス、二〇一八年）が「信仰基礎論」および「キリスト論」を扱った啓蒙書だったのに対して、今回の著作は「人間論」をも土台に据えて「教会論」および「秘跡論」

を集約的に連続させて論じる。つまり司牧現場・宣教現場において結実した信仰生活指南書として本書を味わえる。前著は「キリストとの出会い」を中心主題としたが、本書はキリストと出会った後の「人間による共同体的な信仰生活のあらまし」を提示する。著者の持論は、教会共同体の生活現場での司牧者としての活動を土台として信仰の意味を考察する神学を形成することにある。

2. 本書の構成——人間が信仰を生きる際の極意

第一部は「人間」に焦点を当てており、第二部は「信仰を生きる」ことを勧めるから、本書自体が「人間が信仰を生きる際の極意」を告げる。「第一部 キリスト教の人間観」（人間）は主題としては「からだ」「ペルソナ」「神の似姿」を扱う。キリスト教の立場で人間を理解する際に「からだ

の重要性、人格存在としての価値、神との関係性」が際立った特長となる。「第二部 キリスト教信仰を生きる」（教会共同体と秘跡）は主題としては「祈りと愛の実践」（神の恵に應える）、「過ぎ越しの秘義」（成長）、「教会と共なる歩み」、「み言葉と秘跡」、「罪とのたたかいと修徳」、「福音化・一致・対話」、「終活」を扱う。洗礼を受けてキリスト者となった者が歩むべき信仰生活の共同体的実践の要諦が過不足なく網羅される。

3. 信仰の奥義の伝授——行為の重要性、イエス・キリストの模範に倣うこと、使徒的共同体において生きること

「祈り」に関する見解は卓抜である。祈ることは①行為であり、②イエス・キリストの模範に倣うことによって為され、③イエスとともに生きた使徒たちとのつながりを保つ教会共同体において連携することに主眼がある。これら三点は「生きることは祈ること」（八二頁）という視点へと深まる。しかも師は「第二部第一章」を「祈りと愛の実践」という副題によって方向づけるので、先に述べた三点の祈りの規準は祈りのみならず「愛の実践」にも適用され

る。キリスト者が「愛の実践」を深める際に、①具体的な行為を実際に続けることが肝要であり、②イエス・キリストの生き方に倣って他者と出会うべきであり、③イエスとともに生きた使徒たちの志をつなぐ教会共同体の伝統において行為しなければならぬ。こうして師は常に「祈り」愛の実践」を日常生活のなかで他者とともに具体的に果たし合うことを読者に強く薦める。単なる知的好奇心による教養としてのキリスト教理解を遙かに超えて着実に日常生活に浸透する生き方として信仰を体現することが読者に託される。こうしてキリストとともに生きる者による「信仰の奥義の伝授」を目指して本書が成立したことが一目瞭然となる。日本には古来、藝術や武術の伝承を究める家柄には「秘義伝授」のしきたりがあったが、決して技術の理論的な把握ではなく、むしろいのちがけの生き方を実践的に体得するという意味で、いのちの全体性の受け継ぎだった。キリストのいのちを自らの身心そのものを以て直に伝える仕儀が、伝承としての活きたキリストの道となる。

（あべ・なまこまろー東京カトリック神学院教授、日本宣教会常任理事）
（A5判・四六四頁・定価二二〇〇円・イー・ピックス）

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sesaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_syouen_0530@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-36 教団センター・イワジ	022-223-2736	共用		fcqwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中区新館2-2 千葉カリスチャペル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.avaco.info	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.brighter.jp/~yokohamais/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-inei.or.jp/people/kyodan/	kyodan@mbox.kyoto-inei.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacds.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびらるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三層ビル2F	078-331-7589	078-945-9388		kobex@nikkihan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.gojits.jp/matsuyama_107/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用		kcbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

既刊案内 (2021年4月～5月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
朴 憲 郁	[増補改訂版] パウロの生涯と神学	A5	284	2,750	教文館	4/5
由 木 康 訳	[新装版] キリストにならいて —イミタチオ・クリスチ	四六	282	3,080	教文館	4/13
上 田 光 正	キリスト教の死生観	四六	320	2,750	教文館	4/21
加 藤 常 昭	加藤常昭説教全集32 コリントの信徒への手紙—講話	四六	454	4,290	教文館	4/21
E. シューラー 著 高井啓介、飯郷友康 訳	イエス・キリスト時代の ユダヤ民族史 VI	A5	474	11,000	教文館	4/21
小高 毅、堀江知己 訳	オリゲネス サムエル記上説教	A5	144	2,640	日本キリスト 教団出版局	4/23
鶴 沼 裕 子	逢坂元吉郎	四六	238	2,420	新教出版社	4/23
中 道 基 夫 編	ペンテコステからの旅路	四六	240	1,980	キリスト新聞社	4/30
ルター研究所編	ルター研究 第17巻	A5	166	2,200	リトシ	4/14
黒 川 知 文	マックス・ヴェーバーの 生涯と学問 —神からの使命に生きて	四六	300	1,980	ヨベル	4/5
山 口 衣 子	私のハットフィールド	四六	152	1,430	ヨベル	4/5
崔 炳 一	キリスト教ビギナーズ —キリスト教から 生きる意味を学ぶ	A5	104	990	一麦出版社	4/6
木 下 裕 也	岡田稔の神学	A5	265	6,160	一麦出版社	4/22
『内村鑑三研究』 編集委員会編	内村鑑三研究 第54号	A5	168	3,190	教文館	5/7
山 崎 龍 一	教会実務を神学する —事務・管理・運営の手引き	四六	224	1,980	教文館	5/19
P. リケール、A. ラコック 著 久米 博、日高貴士 耶 訳	聖書を考える	A5	514	5,940	教文館	5/25
深沢美恵子 編著	花子とアン 村岡花子の甲府時代	A5	204	990	教文館	5/25
岡 野 絵 里 子	目覚めていく言葉 —日々を生きるために	四六	128	1,540	日本キリスト 教団出版局	5/25
ヴォルフハルト・ パネンベルク 著 佐々木勝彦 訳	組織神学 第三巻	A5	888	13,200	新教出版社	5/25
主教カリストス・ウェア 著 松 島 雄 一 訳	正教の道 —キリスト教正統の 信仰と生き方	四六	272	2,530	新教出版社	5/25
坂 本 雄 三 郎	実践教会役員	A5	193	1,760	リトシ	5/1

福音と世界

2021年8月号

特集

生きるためのフェミニズム ― 何に抗するか

寄稿者＝菊地夏野、大橋由香子、井谷聡子

村上潔、林みどり

緊急寄稿 祈りという非力な抵抗について ミヤン

マーを覚える祈り会（渡邊さゆり）／好評連載

霊性のエロジー（村澤真保信）、I Say a Little

Prayer 開かれる世界 栗田隆子、福音のフラク

メント（有住航）、古代イスラエル文学史序説（勝

村弘也）、新約釈義第二（テテ書（辻学）ほか

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyu-pb.com

から室集編

海外はおろか、国内での移動にも制限がかかり一体どれくらい経ったでしょうか。あれもだめ、これも不要不急と、家にこもってスマホをいじってばかりでは心がちつとも晴れません。

我が家では数年前からアウトドアがレジャーの主役におさまりました。かつては宿泊費を安く上げる手段でしたが、今やキャンプは自然の中で快適に過ごし、日々デジタル漬けの脳を解放するための、それ自体が目的の行為へと変化を遂げられました。

ところで世の中はソロキャンプブームだそうで、どここのキャンプ場でもカーキ色のポップテントを見かけるようになりまして。そして小型軽量の焚き火台は必須アイテムで

予告

本のひろば

2021年9月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）「試験問題」から生涯の愛読書へ」前川 裕（書評）越川弘英著『キリスト教史の学び』（下）、坂本雄三郎著『実践 教会役員』、崔 炳一著『キリスト教ビギナーズ』、菊地 順著『M・L・キングと共働人格主義』、牧ノ原やまばと学園50年誌編纂委員会編著『それでも一緒に歩いていく』他

す。夕方になると、あちらこちらでオレンジの炎と白い煙が立ち上ります。

都会では、広めの庭付き一戸建てですら、焚き火ができなくなりました。日々の生活で大きな炎を目にする機会がまず皆無です。盛大に火の粉を巻き上げる炎は、人類が野に暮らしたころのプリミティブな感情を呼び興こしているのかもしれない。

焚き火を前にしたら、豆をゴリゴリと挽いてドリップで淹れるコーヒーが欠かせません。ガスランタンの暖かな光の下、スマホは仕舞って、眠たくなるまで好きな小説を読みふけりたい。緊急事態の日々、そんなことを夢想しつつ、近所の小道を探検しています。

「書を携えて、町を出よう」を内なるスローガンとしたい、そんな思いで過ごしています。

（柳澤）

目はかすまず気力は失せず

関田寛雄著 講演・論考・説教

7月26日

モーセのごとく使命に生きる信仰——。40余年の間に語られた48編の講演・論考・説教を収録。93歳になる著者を現役の牧会者・説教者・神学者として生かしめる福音の核心を、余すところなく伝える。

◆四六判・定価2200円



テモテ・ネトス・ワイレモン書

7月26日

カルヴァン新約聖書註解12 / 堀江知己訳



牧会書簡およびワイレモン書の4つの註解を収める。長老や監督など初代教会の職制に関するカルヴァンの読み解きは驚くほど自由で興味深い。愛書家のため函入上製本を限定100部制作します。専門書店にご注文下さい。

◆A5判・並製・定価4730円 / ◆上製函入・定価6380円

100年前のパンデミック

話題!

富坂キリスト教センター編 日本のキリスト教はス・ヘイン風邪とどう向き合ったか

各教派や学校の機関紙誌、また教界の指導的人物の日記を読み込み、当時のキリスト者がスペイン風邪についてどう考えていたのか、また教会としてどのような取り組みをしていたのかを探る。巻末に当時の資料からの詳細な抜粋一覧。従来の歴史の欠落を埋める共同研究。寄稿者 神田健次、戒能信生、三好千春、李元重、辻直人、熊田凡子、上中栄、堀成美ほか

◆A5判・定価1650円

正教の道

キリスト教正統の信仰と生き方

主教カリストス・ウエア著 / 松島雄一訳

正教の教えを簡潔に説き、古代教父、現代の著作家、正教の祈祷文から豊富に引用、その霊性の深さを具体的に伝える。

◆四六判・定価2530円



組織神学 第三卷 畢生の教会論

ヴォルフハルト・パネンベルク著 / 佐々木勝彦訳 **大反響**

終末論的な賜物としての霊に関する教理。「霊の注ぎ、神の国、そして教会」、「メシアの教団と個人」、「選びと歴史」、「第15章 神の国における創造の完成」。第一巻は既刊。第二巻は翻訳進行中。

◆A5判・定価13200円

ヴォルフハルト・パネンベルク
第三卷
組織神学

Systematische Theologie 3
Wolfgang Pannenberg

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL.03-3204-0422 FAX.03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ https://bp-uccj.jp (価格10%税込)

コロナ禍の山谷で食の奉仕を続ける牧師の奮闘と読書礼拝の記録

つるぎ 剣を打ち直して鋤とする すき すべての命に然り

菊地 讓 (日本基督教団山谷兄弟の家伝道所牧師)

高齢化する山谷の地で、牧会のかたわら低額弁当屋「まりや食堂」を長年運営する著者。コロナ下で元労働者たちの「食」を保障する奉仕に奮闘するまりや食堂の日々、伝道所の「読書礼拝」での黙想などを、「眼差し」というキーワードで語る。

◆四六判 並製・232頁・定価2,200円



2021年7月21日刊行予定

電子書籍版 最近の配信タイトルのご案内

*主要な電子書籍ストアでお求めいただけます



絵本 サンガイ ジウナコ ラギ

みんなで生きるために 岩村史子/篠浦千史 文
金斗 絵 徳ヨ三木 ネパール語訳

「みんなで生きる」ことを追求したドクター岩村昇の、ネパールにおける原点のエピソードを描く。



詳細はWEBで
定価1,320円



コラルの故郷をたずねて 小栗 献

宗教改革期から18世紀にかけてドイツ・コラルを育んだ時代と信仰を、賛美歌作家たちが生きた地を訪れて図版や写真と共に綴る。



詳細はWEBで
定価1,760円



その他、電子書籍版として『クリスマスおもしろ事典』、『日々の糧』、『説教者のための聖書講解』『アレティア—釈義と黙想』シリーズを配信中！
タイトル一覧はホームページをご覧ください。(左記QRコードでアクセス可)